

研究紀要

1983

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

埼玉県における古墳出土遺物の研究 I 1

—鉄鎌について—

小久保 徹・浜野 一重・利根川章彦・山本 植
高橋 伸信・田中 正夫・岩瀬 譲・齋藤 芳之

関東における後期弥生集落の一様相 75

—複数の炉を持つ住居をめぐって—

井上 尚明

埼玉県出土の鉄滓と鉄塊 101

高塙 秀治・桂 敏・高橋 恒夫・村上 雄
佐々木 稔・村田 朋美・伊藤 燕

関東における後期弥生集落の一様相

—複数の炉を持つ住居をめぐって—

井 上 尚 明

はじめに

南関東地方における弥生時代の土器編年は宮ノ台式以後、久ヶ原式→弥生町式→前野町式と位置づけられて久しいが、これは現在でも基本的な編年となっている。しかし、1960年代後半から70年代にかけてこの編年では理解できない土器群が各地で発見され、それぞれ代表的な遺跡名をとって型式名が設定されているが、一部は南関東系土器群との関係、編年の位置、細分等が明確になされていないのが現状である。

この様な宮ノ台式期以後の現象はすでに多くの研究者に指摘され、最近では三つの小文化圏（田村 1979）、という様な理解をされている。印旛沼周辺の臼井南（印旛・手賀沼系）式、鶴見川上流域の朝光寺原式、比企丘陵の古ヶ谷式がそれで、大きく見れば久ヶ原、弥生町、前野町という南関東系土器群分布圏の外周部を取り囲む様に分布している。この三者は附加条縄文、櫛描文、斜縄文という代表的な文様に大きな相違があるが、久ヶ原期に至って出現する事や遺跡の立地等に類似点が認められる。

この三者すべてが後期全般に存在したのではなく、これまで確認された資料では吉ヶ谷式以外は久ヶ原から弥生町併行期まで、吉ヶ谷式だけが終末期まで集落を形成していたことが知られている。

この様な関東地方の弥生後期の中で、土器の変化に比して遙かに保守的な住居形態においても各地域でいくつかの相異点が見られるが、本稿では住居の中心的存在である炉の配置や數に着目し、比較、分析する事により後期社会の様相の一端でも示していきたい。

1. 問題点の所在

弥生時代に限らず、住居に関する分析や論考は近年多くなり、特に調査報告書中においても考察が加えられる場合が目立つ様になった。その内容には、登呂遺跡（関野 1954）や平出遺跡（藤島 1954）以来の建築学的な上屋構造の復元や平面プランの問題、住居跡内部の構造に関するものなどがある。最近では、石野博信による一連の研究があり（石野他 1975）、漸く住居についての分析研究がその緒についたと言えるであろう。

弥生時代に限って見ると、特に平面形に関するものが多い様だが、これは他の時代に比して一時期に於ける平面形が多様性に富んでいるという為でもある。しかし、多くは円から方への変遷を再確認するに止っており、平面形自体の呼称も主観的、感覚的な部分に頼っている現在、形態の統一的な表現を求める事が先決であろう（註1）。

平面形については、同一時期、同一集落において異なる住居が併存する事が知られている（註2）が、大局的には明らかに時期差、地域差が存在するのである。久ヶ原式と前野町式の住居跡、或い

は弥生町式と吉ヶ谷式の住居跡の間にはその差が認められる。この様な差、特に地域による差がどの程度その地域の集団の様相を反映するかは明らかではないが、住居形態や集落形態の差が社会構造の差を緩らかでも示すものならば(石毛 1971)、住居の分析も弥生社会研究の一つの手段となるだろう。

久ヶ原・弥生町・前野町式土器分布図(以下南関東系上器分布図と略す)の外周部には、一軒の堅穴住居に複数の炉が検出される例が多く、特に朝光寺原式、吉ヶ谷式の住居に頻度である。一軒の住居に炉が複数あるという点については、幾つかの報告書等で指摘されているが、機能差によるものとする理解をされている場合が多い。しかし、複数の炉を持つ住居が多く発見されるのは、多摩丘陵、比企丘陵といった丘陵地である上に、朝光寺原式土器、吉ヶ谷式土器という南関東系土器群とは異質な土器が分布する地域もある。炉・カマドというものはその家を象徴する存在であり(中根 1970)、一軒の住居に炉が2ヶ所以上あるという現象は、基本的な住居の構造原理の違いを感じられる。ここでは、炉の複数化をもたらした原因を住居構成員の問題と考えて、住居型の分類と各地域間の差を見いだし複数の炉を持つ住居を評価していきたい。

2. 炉を中心とした住居型の分類

方形(長方形)を基調とした住居で主柱穴を4本持っているものを基準としたが、これ以外のもも位置関係からこの分類に準拠した。以下の様に大きくA~Dの4つに分け、更に各類の変形形を加えて8つに分類した。(第1図)

A類

炉を1基だけ有する住居であり、その位置からA-1とA-2に分けた。

A-1類 炉がP₁とP₄を結ぶ線上とYの線上に位置するもので、P₁とP₄の線上にあるものはその50%以上が内側に偏している。

A-2類 XとYの交点にその一部でもかかっているものである。

B類

これも炉を1基だけ有するものであるが、主炉(以下F₁とする)の位置が、D類と一致するのであえて別途に扱った。

P₁とP₄の線上とその外側に位置し、A-1類と逆に50%以上が線上の外側に偏しているものである。

C類

炉を複数(基本的には2基)有するものでF₁の位置はB類と同様であり、第2炉(以下F₂とする)の位置からC-1とC-2に分けた。

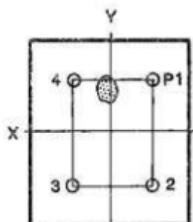
C-1類 F₂がXとYの交点に一部でも掛るものか、F₁側に偏しているものである。

C-2類 F₂がXとYの交点からF₁と反対側に偏するものである。

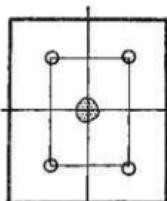
D類

炉を複数有するもので、F₁の位置はB類と同様であり、以下の炉をF₂~F_nとする。D-1からD-3の3つに分けた。

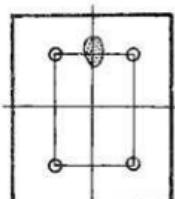
D-1類 F₂がP₁の周囲に存在するもので、XとYの線上には掛らない。



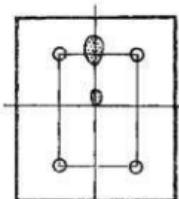
A1



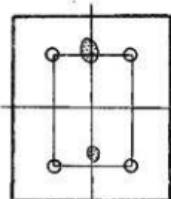
A2



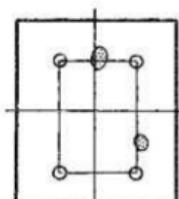
B



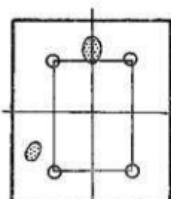
C1



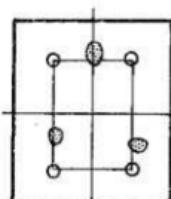
C2



D1



D2



D3

第1圖 住居型分類模式圖

D—2類 F_2 が P_2 の周囲に存在するもので、XとYの線上には掛らない。

D—3類 D—1類とD—2類に合わせたもので、 P_2 の周囲のものを F_2 、 P_3 の周囲のものを F_3 とする。

3. 住居型の地域性

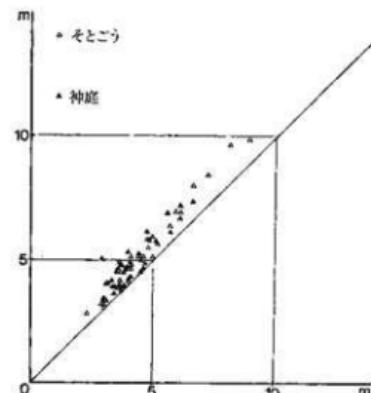
住居跡の平面形の呼称は前述した様に、主観的、感覚的な部分が大きく、統一基準は示されていないが、ここでは取り敢えず神之木台遺跡で示した基準（神之木台遺跡調査グループ 1977）に沿って考えて見たい。つまり、長軸と短軸の長さの差が長軸の10%以上を長方形、それ以下を方形とし、これに隅丸を冠して、刷張りについては視覚的な判断によった。

地域の設定は、南関東系上器分布図と曰井南（印旛・手賀沼系）式、朝光寺原式、吉ヶ谷式の三地域に加えて、更にその外側に分布する樽式、長岡式、十王台式等の分布地域をその他として若干扱った。

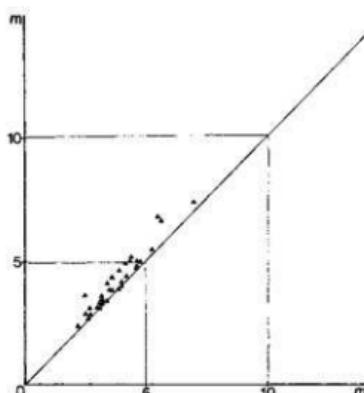
(1) 南関東系土器群分布地域

東京湾岸の平野部を中心に広く分布しているが、宮ノ台式と比較すると狭くなる傾向にある（熊野 1977）。久ヶ原式、弥生町式、前野町式の縦年的な問題については再検討の時期に来ており、たとえば、久ヶ原、弥生町式を時期的な差ではないとする説（岡本他 1979）や以前から議論されている前野町式そのもの的存在に関する疑問等がある。

住居型におけるこの地域の最大の特徴は、A—1類の住居が大部分を占める事で、他類は例外的に存在するのみである。プランが円形、橢円形の場合も炉の位置関係はA—1類の範疇で捉えられるものである。規模は遺跡によってばらつきがあり、森戸原遺跡Y32号住居跡（神原他 1971）の様に長軸が15mを超えるものから3mに満たないものまであるが、5~6m前後のものが多い。また、第1~3表の様に長軸と短軸の差の割合は住居規模に左右されることはなくほぼ方形のラインに沿っている事が分る。つまり、方形を100とした場合、ほとんどが80から90を指している。このことは、他の地域、特にB類、D類が分布する朝光寺原式、吉ヶ谷式地域と大きな相違点となって



第1表 神奈川県そごう・神庭遺跡



第2表 埼玉県鶴ヶ丘遺跡

いる。（第2図）

A-1類は関東地方から東海地方にかけて広く分布しており、北はA-2類と混在する茨城県、西はB類と接する武藏野台地北部、そして南は太平洋岸に沿って東海地方である。このA-1類は宮ノ台式期には確実に存在するが、須和田式期については資料は少ないけれど、池上遺跡（中島他1982）、池上西遺跡（酒井他 1983）ではA-2類に近く、その系譜は中期後半の宮ノ台式期に止まる。また、分布状態を見ると東海地方との関連を強く感じる事が出来る。

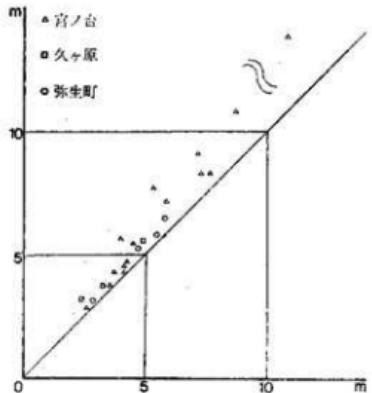
(2) 白井南（印旛・手賀沼系）式土器分布地域

房総地方を中心とした地域では後期の土器は、南関東の編年との対比の中でこれに含まれないものを北関東系土器群と称されてきた。最近ではその中心地域や代表的な遺跡名を取って、印旛・手賀沼系あるいは白井南式といった名称を用いられている。その分布は印旛・手賀沼系という名が示すとおり、印旛沼・手賀沼周辺とりわけ印旛沼の南の佐倉市を中心とする地域である。時期的には久ヶ原式後半から弥生町式期にわたる短い期間で、特に久ヶ原式期の後半を中心としている（斎木他 1973）。

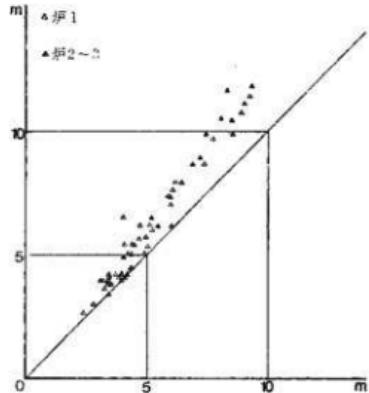
この地域も概ねA-1類が主体的位置を占めているが、南関東系地域とプランと規模の関係などに違いが見られる。規模については、やはり遺跡によってばらつきがあるが全体的に大形化の傾向にあり、更に長軸と短軸の差は規模に影響され、大形になるにつれてその差はひらいて行く。したがってプランも隅丸長方形、またはトランク形と言われる様な形が多くなり、同じA-1類とは言ってもプランだけを見ればむしろB類に近いといえる。また、C類、D類の様に定形化はされていないが、複数の炉を持つ住居も存在し（第4表）、江原台遺跡（田村 1979）では一割強を数える事が出来る。

(3) 朝光寺原式土器分布地域

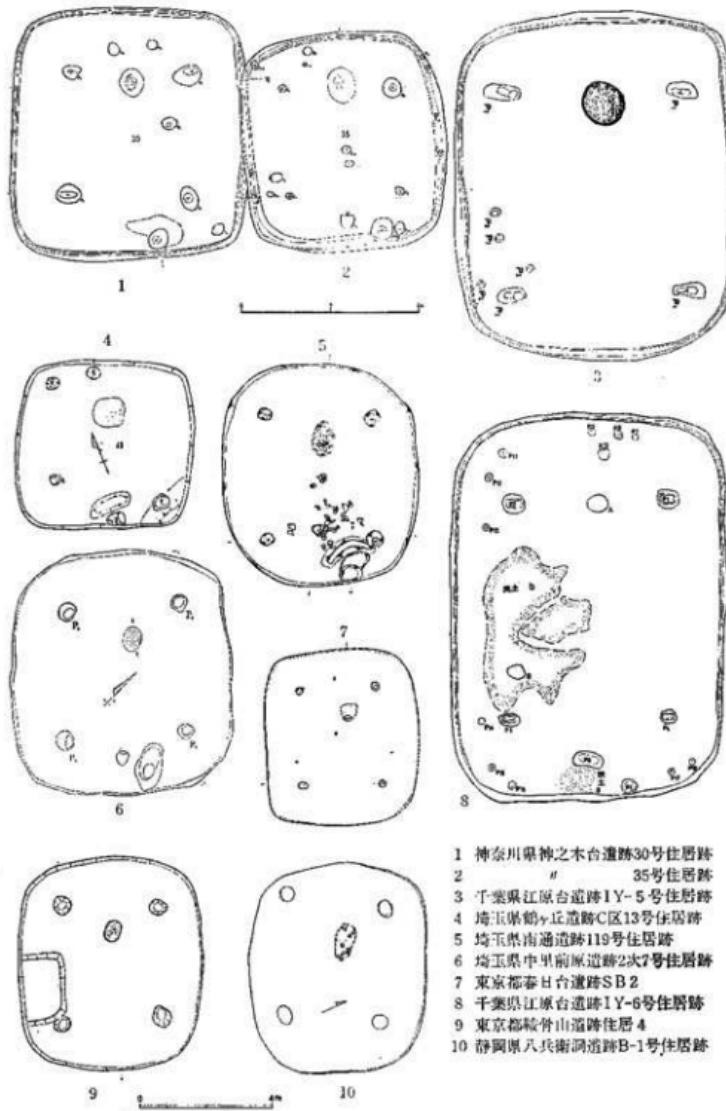
鶴見川の支流である早瀬川、谷本川、恩田川の流域を中心として分布し、特に早瀬川と谷本川に挟まれた丘陵地帯に集中している（第3図）。複雑に入り組んだ小さな谷が幾つも連なり、この谷



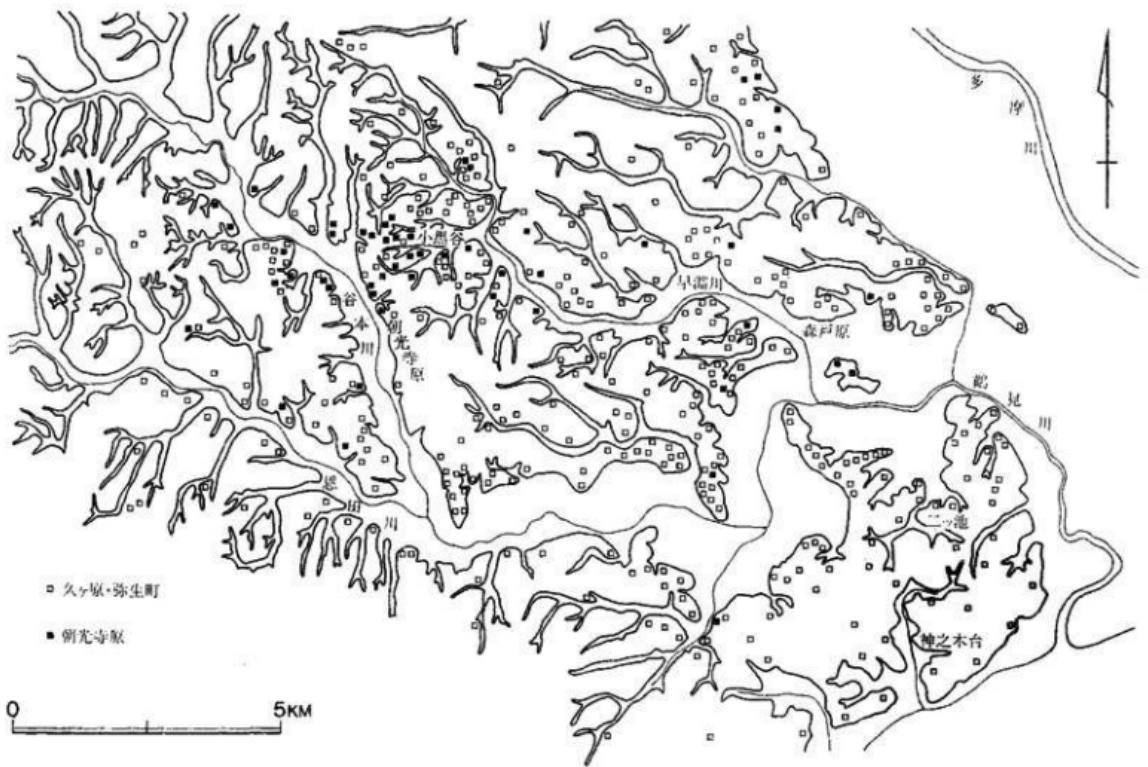
第3表 神奈川県森戸原遺跡



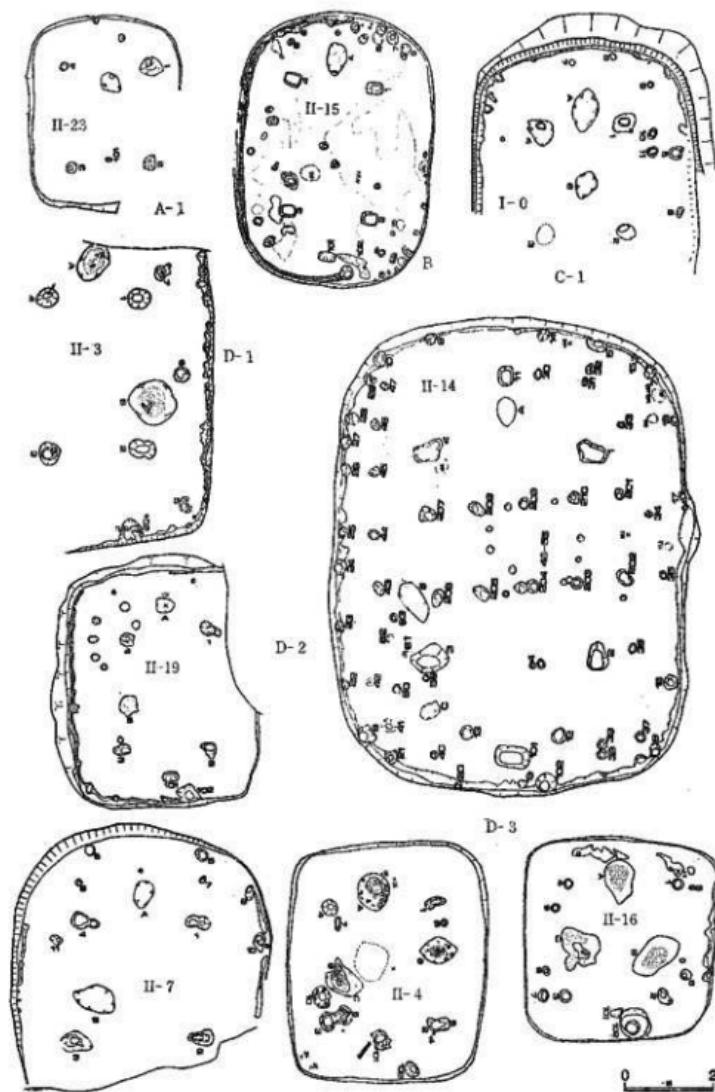
第4表 千葉県江原台遺跡



第2図 南関東系の住居型（A—1類）



第3図 薩見川流域弥生時代遺跡分布図



第4圖 小黑谷遺跡各類住居跡

第5圖 小黑谷遺跡



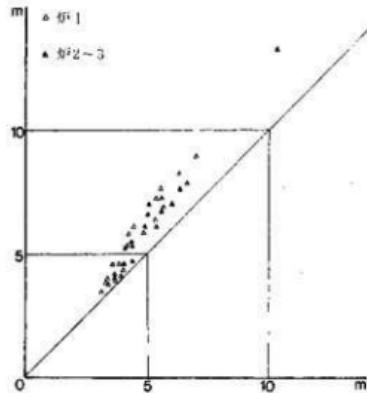
に挟まれた狭い平坦面あるいは傾斜地に集落が立地している。最近の調査では、朝光寺原式土器がこの地域以外からも出土する例は増加している。しかし、その数は決して多くはない、この狭い範囲の丘陵地がこの土器の中心地である事に変りはない。また、この地域は南関東系の土器の分布圏でもあり、両者の分布が重なってもいる。

A類からD類までが混在しているが、B類、D類がその主体を占めている。最近の調査では朝光寺原式の資料が増加している様だが、朝光寺原遺跡を含め報告書が刊行されていない為その実態が不明であり、これまで資料的に最もまとまっている小黒谷遺跡(谷他 1973)を例に上げてみよう。住居規模はA-1類地域よりやや大形のものが多く(第5表)、長軸6~7m、短軸5m前後を平均としている。長軸と短軸の差は住居規模が大きくなるにつれて広がり、指標は75%を指す様になる。小黒谷遺跡では規模、形態の分かれる住居跡35軒の内A類は1例のみで、D類が6割以上を占めつづいてB類が3割、C類が僅に存在する(第4図、5図)。この地域が南関東系土器群と混在する地域で有りながら、土器と共に住居型においても大きな違いが見られる。

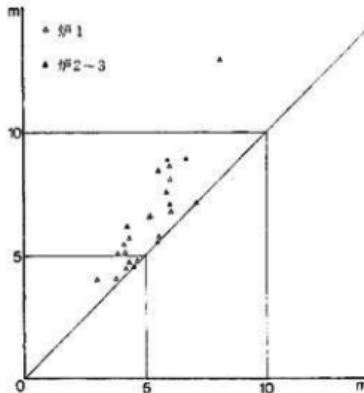
朝光寺原式は、櫛描文土器とB類・D類の住居という、南関東系土器群分布地域にあっては独自な様相を呈しているが、その存続期間は短かく、終末期を迎える前に姿を消してしまうのである。

(4) 吉ヶ谷式土器分布地域

比企丘陵を主な分布地域としているが、北は群馬県東部から栃木県にかけて見られる赤井戸式との関連が問題にされ(小島 1982)、南では横浜市の戦勝土遺跡(坂本他 1975)や小黒谷遺跡等で出土している。集落としての分布はとりあえず赤井戸式を別にすれば、児玉郡の神明ヶ谷戸遺跡(岡本他 1980)、生野山古墳群が北端で川越市設ヶ関遺跡が最も南である。最近の調査では秩父山地の両神村薬師堂遺跡(曾根原他 1979)、熊谷低地の行田市池守遺跡(斎藤 1981)等で吉ヶ谷式土器が検出され、丘陵地以外の出土例が増している。また、大宮台地では桶川市丸山遺跡(今井 1983)や吹上町袋・台遺跡(田部井他 1982)でも確認され、南関東系土器群との共伴例から編年対比の好資料となっている。

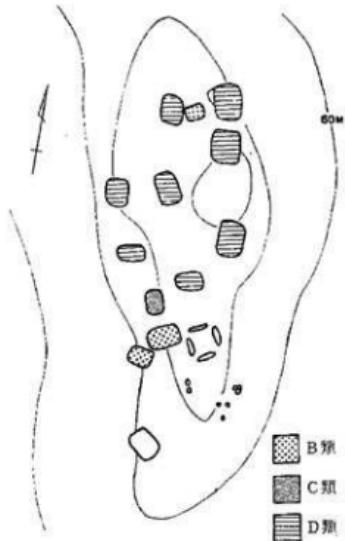


第5表 神奈川県小黒谷遺跡

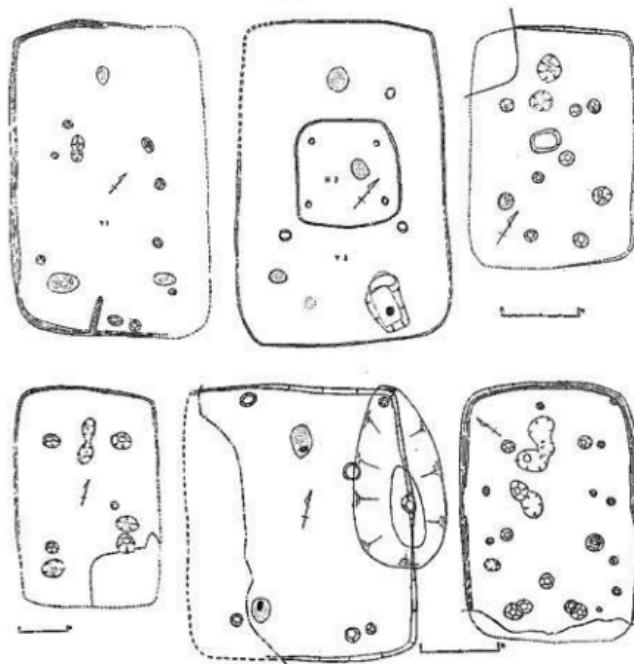


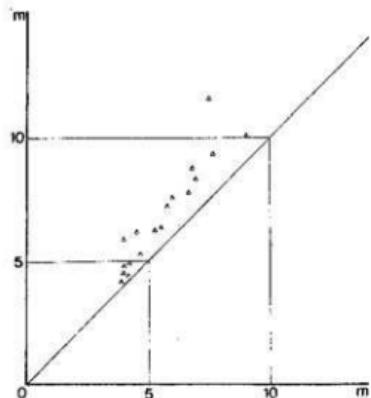
第6表 埼玉県駒場遺跡

第6図
駒堀遺跡住居型別分布図



第7図 埼玉県駒堀遺跡B～D類住居跡





第7表 埼玉県岩鼻遺跡他

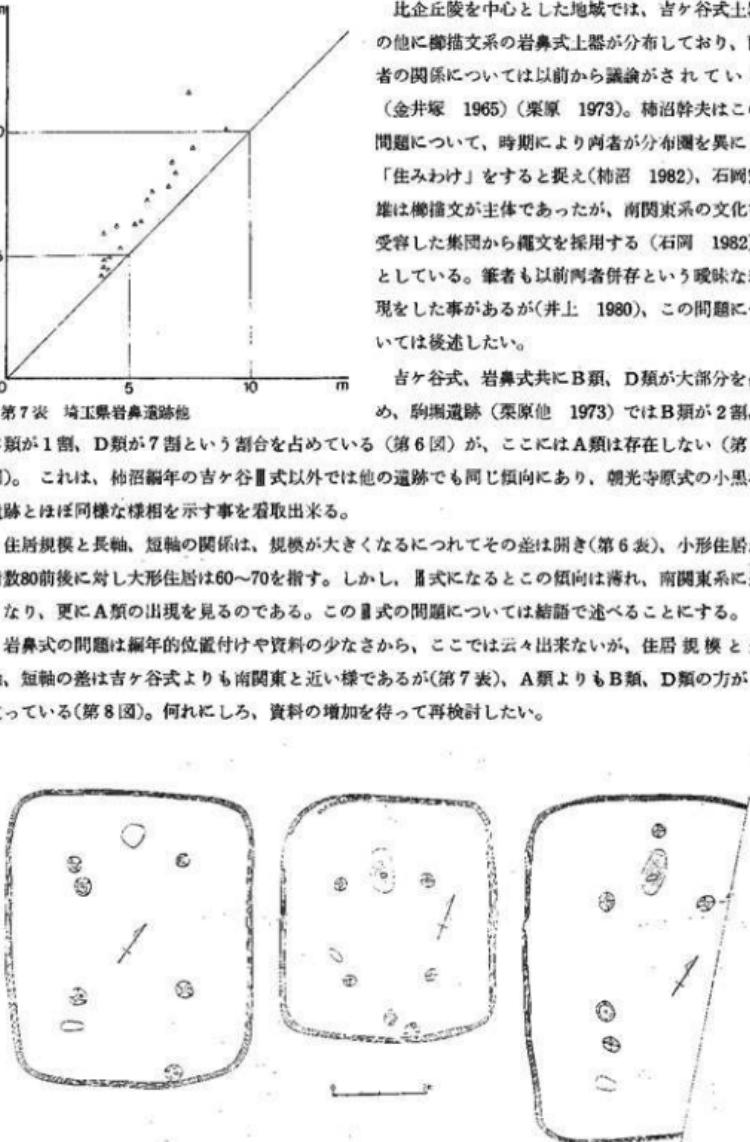
C類が1割、D類が7割という割合を占めている(第6図)が、ここにはA類は存在しない(第7図)。これは、柿沼編年の吉ヶ谷式以外では他の遺跡でも同じ傾向にあり、朝光寺原式の小黒谷遺跡とほぼ同様な様相を示す事を看取出せる。

住居規模と長軸、短軸の関係は、規模が大きくなるにつれてその差は開き(第6図)、小形住居が指数80前後に対し大形住居は60~70を指す。しかし、Ⅲ式になるとこの傾向は薄れ、南関東系に近くなり、更にA類の出現を見るのである。このⅢ式の問題については結語で述べることにする。

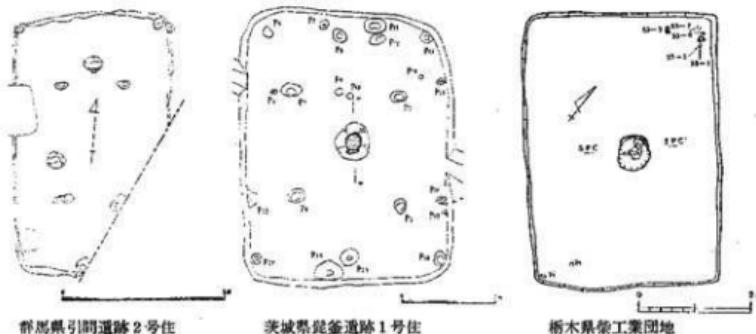
岩鼻式の問題は編年的位置付けや資料の少なさから、ここでは云々出来ないが、住居規模と長軸、短軸の差は吉ヶ谷式よりも南関東と近い様であるが(第7図)、A類よりもB類、D類の方が目立っている(第8図)。何れにしろ、資料の増加を待って再検討したい。

比企丘陵を中心とした地域では、吉ヶ谷式土器の他に御描文系の岩鼻式土器が分布しており、両者の関係については以前から議論がされている(金井塙 1965)(栗原 1973)。柿沼幹夫はこの問題について、時期により両者が分布圏を異にし「住みわけ」をすると捉え(柿沼 1982)、石岡憲雄は柿沼文が主体であったが、南関東系の文化を受容した集団から離文を採用する(石岡 1982)としている。筆者も以前両者併存という曖昧な表現をした事があるが(井上 1980)、この問題については後述したい。

吉ヶ谷式、岩鼻式共にB類、D類が大部分を占め、駒場遺跡(栗原他 1973)ではB類が2割、



第8図 埼玉県相模原遺跡D類住居跡

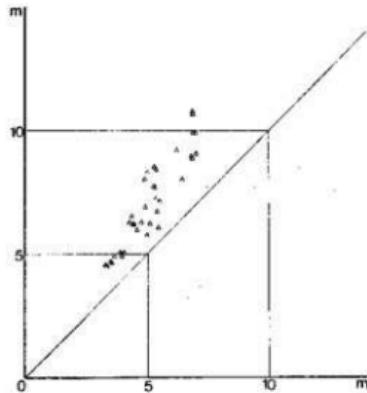


第9図 北関東の住居跡

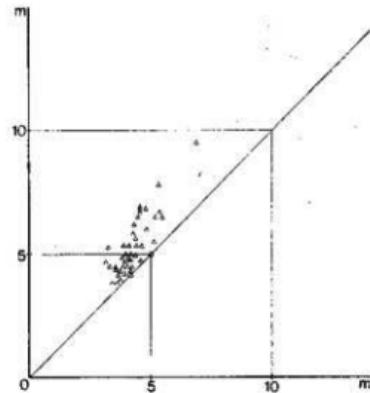
(5) その他の地域

南関東系土器群の地域にはA-1類住居が広く分布し、その四側の丘陵地帯にはB類、D類の地域が存在する事をこれまで見てきたが、それでは北関東から東関東の群馬、栃木、茨城方面ではどの様な様相を呈しているのであろうか。

群馬県では樽式、赤井戸式が知られているが、樽式はB類の住居が半数以上を占め、A-1類、D類がこれに続く。また、住居規模に関わらず全体的に長軸と短軸の差は大きく（第8表）長方形のプランが多い。赤井戸式については集落の調査例が少ないので明らかではないが、峯岸山遺跡（巣田 1975）では円形系統の住居が主体を占めており、東日本の赤井住居の中では異質な存在である。土器については吉ヶ谷式との関係が伺えるが、住居型からは関連性が見られず、調査例の増加に期待したい。最近の調査では、やはり長方形、方形を基本とする例が増しているようである（小島 1983）。



第8表 群馬県引間遺跡地



第9表 茨城県北山遺跡

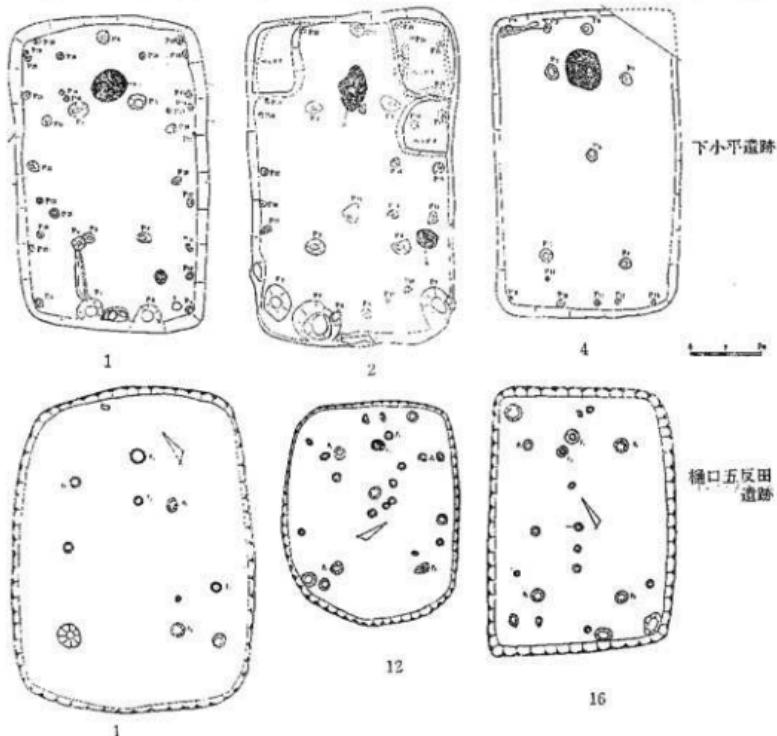
栃木県から茨城県にかけては、二軒屋式、十王台式といった土器が分布しているが、住居型について見れば差はほとんどなく、A—2類がその大部分を占めている。プランは、たとえば毘鄰遺跡（井上他 1980）を例にとると、プランのわかる46軒のうち円形の2軒以外は長方形系統に有り、規模も、特に大形とか小形の住居は少なく長軸5m前後に集中している（第9表）。

A—2類というのは他の地域で例外的に見られる程度であるが、東北地方南部から栃木・茨城にかけて広く分布している（第9図）。炉が中央にあるという点では縄文時代的な様相であるが（註3）、関東地方では須和田期の住居にA—2類のものが多いといえる。

北関東地方については、飯塚は、壁の直線化を始めたこの地方に共通した住居址の形状は関東地方では、概ね「横描文土器」の分布と重なるようであるという指摘をしている（飯塚 1983）。このことは後章で述べるように、筆者と一致する面もあるが、飯塚の論文は途中であるので、この現象をどのように考察するか今後に期待したい。

3. 炉を複数持つ住居の分布と系譜

C類、D類の住居の存在が顕著な地域は、朝光寺原、吉ヶ谷式分布地域で、構式の地域にも存在



第10図 中部高地の住居跡

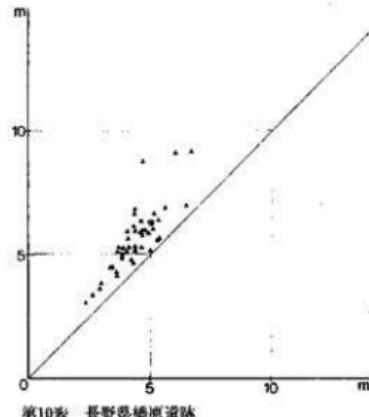
する事はこれまで述べてきたとおりである。他の地域でも例外的に存在するが、F₁、F₂の規模も小さく定形化されておらず、D類とは同一レベルでは考えられないものである。また、ここで注目したいのはB類の住居である。C類、D類と混在することはあってもA類とは一線を画す事ができ、平面プランもC類、D類と同様に長方形系統に有り、この両者が非常に近い関係があるといは同一線上で捉える事が出来るであろう。つまり、F₁がP₁とP₂を結ぶ線上より壁よりに偏位する事はF₁、F₂を充分意識しての事であり、同じ磁極の磁石の関係の様に一定の距離を置く事により安定するのである。更にこれに伴って住居の長方形化を引きおこしていったと考える事が出来る。B類をこの意味で考えて見れば、C類、D類が存在する集落環境の中にあってF₁、F₂の有無以前の問題としてF₁の位置が決定してしまったのである。B類はC類・D類と同一範疇で扱ってこそ意味があるのである。

さて、B類～D類の分布を考える上で重要な地域がある。それは中部高地であって、第10図の様に、長方形系統のB～D類の住居が存在するのである(第10表)。しかし、この地域は埋甕が主体を占める天竜川流域と地床炉を中心とする千曲川流域に分ける事が出来る。前者は橋原遺跡(会田他 1981)、樋口内城跡遺跡(山田他 1973)、木下北城遺跡(林他 1977)の様にB類、C～D類が多く認められる。後者は下小平遺跡(林 1981)、屋地遺跡(大川他 1977)、四ツ屋遺跡(矢口他 1980)でB類、D類が見られ、下小平遺跡Y-2号住居跡のごとく曲型的とも言えるD～D類がある。この両者のうちで平面プランを含めて関東地方のB類、D類と類似性が認められるのは言うまでもなく後者であり、系譜を考える上で看過する事の出来ない地域である。林、花岡によれば、千曲川流域において炉の複数化が認められるのは後期初頭の吉田式期からであり、箱清水式期に成り検出例が増加し、後期末にはほとんど認めなくなるという(林、花岡 1983)。この点に於ても関東地方と共通性が見られるのである。

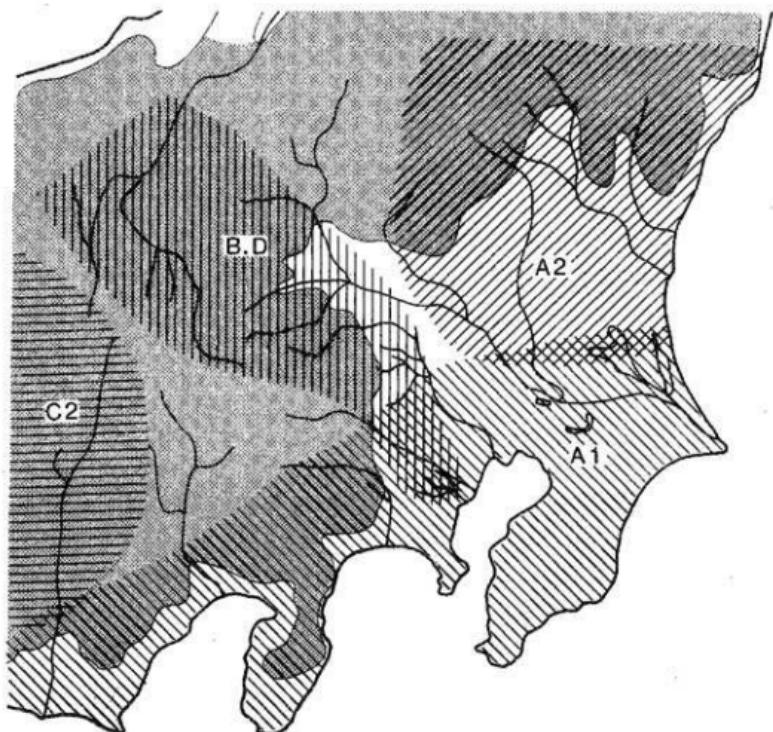
B類・D類の分布を北から追って見ると、千曲川流域を中心とした中部高地から群馬県西部そして埼玉県西部の丘陵地帯、武藏野台地の大部分を飛び越えて鶴見川流域の丘陵地帯に到るのである。これを大きく捉えると飛騨山脈と関東山地の東端を帶状に長く分布している事がわかるのである(第11図)。

次に中部高地から鶴見川流域に到る地域の様相を第11表に基づいて考えていきたい。

天竜川流域の埋甕が主体の地域は、B類が半数以上を占めており、つづいてC類が2割程度であるが、A類、D類は僅かに存在する程度である。千曲川流域でもやはりB類が目立っているが、A類も4割近く、つづいてD類が2割程度を占めている。しかし天竜川流域で見られたC類はほとんどなくなり、近接した両地域でありながら埋甕の有無と共に大きな違いを示している。



第10表 長野県橋原遺跡

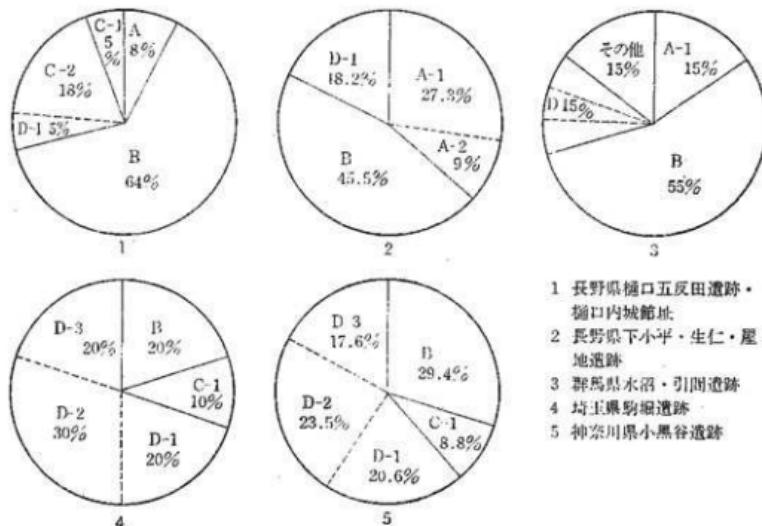


第11図 各住居型の分布図

持式では、やはりB類が多く約半数を占めており、次にA類、D類がつづいている。なおこの表でその他としたのはD-2類からF₁が欠如した型であり、変則的ではあるが基本的にはD類に含めてもよいと思われる。こうなると、D類がB類につづく多さとなる。吉ヶ谷式は時期により住居構造に変化が認められるが、終末期のⅢ式を除いては、ほぼ朝光寺原式と同様な在り方で、その差はほとんど見出せない。

この様に、天竜川流域では、埋葬炉の存在そしてB類、C類、特にC類の占める割合が高いことは他の地域との大きな違いであり、千曲川以南のB類、D類地帯と一線を画することができる。千曲川流域から鶴見川流域に及ぶB類、D類地帯の中で、吉ヶ谷式だけが繩文を採用しており、一見全く異質な存在であるかの様に受けられるが、この様に住居型の分布からは親縁性を感じる事が出来るのである（第11図）。

以上の様に複数の炉を持つ住居は山地、丘陵地を中心とした地域に分布しているが、その初源は前述した様に中部高地では後期初頭で、関東地方でも宮ノ台式期にはその姿は見られない。逆に群



第11表

馬では樽式の母体ともいえる（井上他 1977）竜見町式では清里・庚申塚遺跡（相京他 1982）でプランの分る14軒中9軒がA-2類という状況を呈している（註4）。従ってB類、D類といった住居型は後期に至って出現するのであろう。

樽式や朝光寺原式は中部高地型櫛描土器として捉えられており、更にその分布はB類、D類の住居の分布とほぼ一致するという現象からすれば（宍沢 1978）、当然土器、住居共に中部高地の影響下にあったと考えられる。後期に到り関東の丘陵地において、中部高地の影響を受け、炉の複数化をもたらす諸条件が整っていたのであろう。その条件とは、住居の構造上、機能上での問題ではなく、住居を構成する人間集団に関わる様なより内的な問題であったと思われる所以である。

4. 炉を複数持つ住居の評価

B類を含めた複数の炉を持つ住居は帶状に南北に分布するが、この中で特に吉ヶ谷、朝光寺原式の地域は、A類の分布地域と交錯するかあるいはA類の中に孤立的に存在している。A類の支配的な関東地方にあって、B類、D類をどの様に位置付けて考えたら良いのであろうか。F₂、F₃の存在に関してその可能性を2・3あげてみる。

まず、これまで何度か指摘してきた様に、炊飯を含めた採暖、採光といった実用的な機能面による炉の分化が考えられる。つまり、F₂を炊飯用とするならば、F₂・F₃を採暖、採光用として利用したという事である。これと同じ意味ではないが、小黒谷遺跡の報告者は（谷 1973）F₂、F₃の存在に注目しつつ、F₂を主炉他を副炉、焚火址と各炉を区別し、焚火程度の火も使用されたとしている。この様に、F₂と比較すると規模も小さく構造的にも貧弱なF₂、F₃がある事も事実である。

が、F₁と比して何ら遜色のないそれ自体単独でも炉と認められる、枕石を設けた様なものも多いのである。単に位置的な問題でのみF₂、F₃としたものすらある。果して、採暖、採光の為に枕石まで配したり、F₁と同規模の炉を必要としたのであろうか。更に、同じ自然条件下にありながらA類の様に採暖、採光を要しない住居とF₂ばかりかF₃まで設けたD—3類の住居がある事も疑問であり、上屋構造に幾らかの差があろうとこの問題を解決する事にはならない。

次に考えられるのは祭祀であり、祭祀には火を用いるものが多い。高地あるいは丘陵地帯においては、限定された集落立地の問題あるいは狭く入り組んだ谷戸田の開発、そしてその生産性の問題等、沖積平野に面したA類の集落とは集落の維持や管理において違った面での問題が多かったであろう。この様な事から祭祀を想定する事は差程困難な事ではない。しかし、B類、D類は混在しており、その間に一定の規則性や統一性ではなく、またD—1、2類とD—3類との違いの意味もはっきりしない。ここでは、祭祀の可能性もあるという指摘に止めておきざるを得ない。

F₂、F₃に関して考えられる代表的なものを見てきたが、次に前章の最後に述べた様に、視点を変えて住居構成員の違いという居住様式に関わる点からこの問題を考えてみたい。

住居構成員とは一つの住居に居住する集団の事であり、カナダのヘヤーの様な一時的な居住集団でない限り(原 1983)、それは家族と結びつく事が多い。家族とは血縁関係や婚姻関係からなる最小の第一義的な社会集団であり、核家族から拡大家族までその構成員には差がある。この家族の単位を表現する用語には、民族誌的に見ると、火・カマドを語源とするものが多く(中根 1970)火・カマドが家族と呼ばれる集団の象徴的指標となっている。ちなみに、日本語のイニという言葉もカマドを意味する he に前頭詞の i が付いたものであり、日本の場合多くの民族例にもれない。

では、火・カマドを中心見た住居の仕方の例を幾つかあげてみよう。

有名な例としてボルネオ・イバン族のロングハウスがある。これは100mを越えるものまであり、家族の集合体として地域社会を形成している。しかし、ここに住む家族群は閉鎖的なものでなく自由な参加、脱退が可能で、共同体として経済活動を共にするものではない。つまり日本農村の組の様な機能的な近隣集団なのである。セイロンの Kandyan Sinhalese は、カマド単位の集団=家族がいくつか集まって1つの建物を構成しており、各集団は別個の倉庫、台所を持っている。また、北アメリカのイロコイ族は8~10家族が1つの家屋に住み、2家族ごとに1つの炉を所有している。

この様に、1つの建物に数家族が居住している例はあり、ががある程度その数の目安となっている。しかし、B類~D類の住居をそのままこの考え方方に当てはめることはできない。たとえば小黒谷遺跡Ⅰ—16号住居跡はD—3類でありながら、わずか15m²程度の面積しかなく、たとえ最小単位の核家族であっても3家族が同居するのは物理的に無理である。この場合炉の数=家族の数と短絡的に結びつけ、ロングハウス等と同等のレベルで論じる事は危険である。それでは、主に火を扱う人間について考えてみると、それは多くの場合女であり妻である。そこで炉の数を火を扱う女・妻の数として捉えられるであろうか。いくつかの民族例等を引用しながら火を扱う資格のある女性が同居する場合の例を考えてみよう。

イスラム社会では一夫多妻が社会的に容認されているが、東アフリカのスワヒリ族の場合は、妻達は同一宅地内にその子供と生活する家屋があり、各自独立した生活を営んでいる。家長である夫

だけが各家屋に間与する事が出来、原則として最初の妻が管理する家に居住し食事をする事になっている。各妻の家の規模、形態、家具、什器類はほぼ同一であり、耕地も各々配分されている（石毛 1971）。つまり、夫は妻の数だけ同じ様な家を建てて、自分自身の家は持たないのである。同じアフリカのタレンシー族では、各妻は dug と呼ばれる部屋、台所、倉庫そしてこれらに面した中庭を持ち、2人以上の既婚女性が台所を共にするという習慣はない。1つの屋敷地内には母を含めて既婚女性の数だけ dug が存在するのである（中根 1970）。

西イリアンのモニ族の場合は、住居を男のパートと女のパートに分け、男の部屋は4、5歳以上の男の家族全員、女の部屋は女の全員と男の幼児で構成される。各々の妻は独立した女の部屋を与えられるが、母を別にする息子達は家長である父と同居する事に成り、1棟の住居の中を仕切って1つの男の部屋と2つ以上の女の部屋に分割される場合もある。炊事は原則として屋外で行われるが、雨天の場合には女の部屋の中で行われ、男の部屋でもイモを焼く位の料理は出来る（石毛 1971）。同じ西イリアンのモニ族と同じ地域に居住しているウェスタンダニ族は、集落には1棟の男の家と数棟の女の家があり（日本民族学会 1969他）、広場に面した男の家には集落=1支族の男の成員全員が合宿生活を営んでいる。男は結婚後も妻子と離れて男の家で暮し、死ぬまで男の家の成員であり続けるのである。女の家には夫を共にする2組の妻子だけでなく、別の男の妻子が同居している場合も見られ、男と同様な合宿生活をしている。ウェスタンダニ族の場合は1棟の建物を見ただけでは住居の単位は完結しないのであり、集落全体を問題にしなければならないのである（石毛 1971）。

南アメリカのカマユラ族のオクと呼ばれる共同家屋は父系の親族25人～30人位で構成され、ここには個人や特定の家族を重視した空間はない。オクの中央には炉があつて家長の妻が食物の調理、配分をする。夫婦単位のハンモックを吊る空間が分散し、上段に夫、下段に妻達のハンモックが並んで吊られており、私的な空間は存在しない（大船 1977）。

ここで日本の場合を見てみると、讃文時代の複婚制を扱った春成秀爾の論文がある（春成 1981）。これは住居内遺棄遺骸と抜歯型式の分析から複婚制の可能性を指摘したものであるが、住居構造の面からは分析資料の越山遺跡、子和清水遺跡等と他の地域、他の時期との違いはなく、ごく一般的な住居跡である。このことは狩猟採集社会である讃文時代と農耕社会の弥生時代と同じ視点で捉える事は出来ないが、複婚制による居住の方法が讃文時代に一般的であったか、あるいは住居構造上の違いには表出しなかった為であろうか。また、弥生時代について見れば魏志倭人伝の記述には次の様な一文がある。「其俗国大人皆四五婦、下戸或二三婦、……」これは邪馬台国が、どこにあったかは別としても、2、3世紀の日本に一夫多妻が認められた事を示すものであろう。大人と呼ばれる身分の男は皆4人から5人の妻を持ち、下戸と呼ばれる身分の男には2から3人の妻があった場合もあるという理解が出来る。大人と下戸がどの様な身分で両者の差がどの程度であったかは不明であるが、2人以上の妻を持つ事が出来たのは一部の特定階級の者達だけではなかった事を示している（註5）。

以上の様に、一夫多妻とは言っても各地域によって様々な居住の仕方があり、更に同一地域に於ても西イリアンのモニ族とウェスタンダニ族の様な違いも見る事が出来るのである。炉のあり方に

ついても、炉の数=妻の数と言う様に短絡的には捉えられず、2つの炉を持つ場合でも樺太アイヌは家族の多い家、2世帯同居の家、格式の高い家と言う様な場合がある。また沿海州諸族に於ても2つの炉は双分組織の表現の一つとして考えられている（大林 1971）。「魏志倭人伝」に記された様な弥生社会の様相も、どの程度住居形態や集落形態に反映されるであろうか。西日本の弥生時代中期～後期の住居、集落の検討が必要であろう。

さて、これまで見てきた例の中で、西イリヤンのモニ族、ウェスタンダニ族の様な、男女の居住の仕方を制限し、男女を隔離する場合は多く（泉 1972）、月経小屋や産屋等もこの考えの中で捉える事が出来る。日本では弥生時代に限らず、遺構から男女の隔離については明らかにされていないが、一住居内における空間の分離はされていたと考えられる。その方法としては、間仕切りの様な遮蔽物によって視覚的にも意識的にも空間を分割する方法や、物を置いたり何かを用したりという簡単な方法がある。また、柱や炉を基準にした意識的な分割も考える事が出来る。室内に壁を造ったり間仕切り施設を組む事は大した労働力や時間を必要としなかったであろうが、あえてそれをしなかったのは居住員共通の空間を保つこと、先にあげた意識的な空間分離が存在した為であろう。この様な住居空間の分割という面からD類の住居を考えて、前述の民族例と比較してみよう。諸例の中では特に西イリヤンのモニ族との共通点をあげる事が出来る。モニ族は定住的な焼畑耕作をし、家族単位で畠を耕すが、共同の農作業をすることはほとんどない。家族は朝と夜の就寝の前に全員が男の部屋に集まって炉端で団欒の時を過ごす。このモニ族の炉のあり方をD類と対比して考えると、F₁を家長である夫の炉、F₂、F₃を各妻の炉とする事が出来る。しかし、F₁を家長の炉とすると、前述した主に火を扱うのは既婚女性であるという考え方と矛盾する事にもなるが、F₁を第1夫人の炉とするにはその位置関係が問題になる。つまり、各夫人を平等に扱うという一般的な例から考えると、F₁は2本の柱間に位置し多くの場合4本柱の内2本を占有する事に成る。更に住居内全体を見渡せ、居住員の動静を掌握する様な場所を占めているのである。F₂、F₃が各1本の柱を中心に設置されている姿とは同等には扱えない。F₂、F₃が近接することなく、また主柱の数以上に存在しないのは住居規模による制約の他に、柱を中心とした意識的な領域があったと考えられる。F₁とその周囲は、家長の場であると共に居住員全員の共通の場でもあり、構造的にもスワヒリの様に第1夫人がここで主な飲事をした可能性もある。ここでは複数の炉の意味を以上の様に理解していくたい。

これまで何度か記した様に、B類、D類の分布地域は山間地や丘陵地であり、吉ヶ谷、朝光寺原の様に谷戸田を主な生産の場としている。一夫多妻と言ふ様な婚姻形態がこの地域と「魏志倭人伝」が伝えた地域だけには限らない。しかし、B類、D類の分布域では生産性の良くない谷戸田の開発と維持に必要な労働力の確保、そして狭い集落立地での住居増加に対する制約があったであろう。更に、優勢な羽状縄文という異質な土器を持つ集団に対する種族維持の危機感等が一夫多妻を指向していくたと考えられる。

5. 結語

これまで、複数の炉を持つ住居の分布や系譜等について述べ、炉の複数化という現象を一夫多妻という様な婚姻形態と関連付けて考えてみた。この問題については今後も検討していくたいが、最

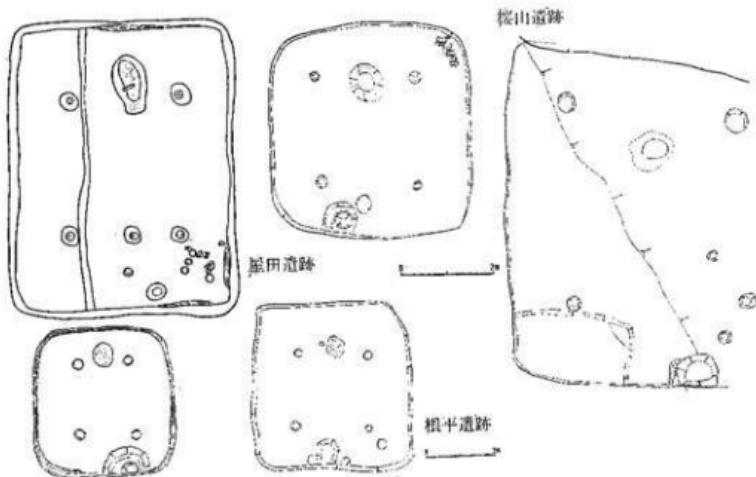
後に今まで触れられなかった炉以外の住居内施設について考察を加えて、後期集落の様相を素描したい。ここでは特に吉ヶ谷式について分析し、これまで述べてきた居住に関する問題に内付けをすると共に吉ヶ谷社会の変遷を考えてみたい。

B類、D類の住居型の分布はいわゆる中部高地型櫛描文土器の分布とほぼ一致し、A-1類は東海型櫛描文土器の分布とほぼ共通している（佐沢 1978）。この様に土器と住居型の分布が重なることは多いが、これは土器様相が住居型と密接な関係にあったことが伺える。この様な状況下にあって吉ヶ谷式土器は特異な存在であり、繩文施文という異質な土器を持ちつつB類、D類住居を採用している。この問題については同地域に分布している櫛描文系の岩鼻式土器が鍵となる事が予想され、前述した西イリアンのモニ族とウェスタンダニ族のような共存関係を想定できるが、ここではその可能性を指摘するにとどめておく。

B類、D類の分布の中で吉ヶ谷式と南の朝光寺原式の間、つまり武藏野台地にあたる部分でその分布が途切れる。この両者は繩文施文と櫛描文施文という違いがあるにも関わらず、いくつかの共通点があり、共存関係からも交渉のあったことが伺える。世田谷区の下山遺跡（寺畠他 1982）では、南関東系土器群に混って吉ヶ谷式、朝光寺原式土器が出土しており、報告書では集落形成期には朝光寺原式土器が、集落発展期には吉ヶ谷式土器が出土するという。更にその後には東海系土器が検出されており、興味深い例といえるだろう。この様に南関東系土器を含めた形で三者の交渉を見る事が出来るが、下山遺跡の様に南関東系土器群主体の集落からは朝光寺原、吉ヶ谷式土器が出土する例は少なく、その逆の例が多い。鶴見川中流域の新羽大竹遺跡（岡本 1980）や専念寺裏遺跡（註6）でさえ朝光寺原式土器の破片しか出土していないという事実は、ある程度一方的な交流を考えてよいのかも知れない。但し、器種構成の違いと交流に利用される器種については今後の課題であろう。

さて、B類、D類といった住居型は後期末葉になるとほとんど姿を消すが、これは南関東系土器群の外周部に分布する土器群の存続期間と一致する。この中で吉ヶ谷式だけが終末期までも残ることが知られているが、住居型については、A-1類の出現、プランの長方形から方形化という変化が見られる。また、住居内各部においても様々な変化が現われ、これまでとは違った住居、集落の様相を示している。ここでは、貯蔵穴とベッド状造構を通してその変遷を考えてみたい。

亦生時代の貯蔵形態には、1 層外土壇・2 層内土壇・屢内懸垂・3 高床倉庫の 3 形態があり（石野 1975）、屋内土壇は中期以降に出現する。関東地方では屢内土壇は、炉と反対側の壁直下にある場合が多く、凸帯が周るもの、小ピットで囲まれるものなどいくつかの種類がある。この屢内貯蔵穴は関東地方では宮ノ台式以降一般的な存在であり、遺跡によって多少差はあるものの、所有率は 6 割以上であろう。更にその内の 3 割近くが凸帯を伴っている。しかし、吉ヶ谷 I、II 式では貯蔵穴を持つものは数例しかなく、しかも駒塚遺跡 Y-5 号住居跡の様に規模、形態も一般的でないものがある。凸帯を伴うものはこれまで知られていない。ところが吉ヶ谷 II 式になると、第12図の根平遺跡（水村 1980）、桜山遺跡（小久保 1981）のごとく南関東の住居と何ら変わらない貯蔵穴が出現するのである。阿遺跡の 7 軒の住居中貯蔵穴を持たないのは 1 軒だけという状態で、凸帯も伴うものが多い。では、この様な住居単位の貯蔵施設が出現以前の吉ヶ谷 I、II 式ではどの様な貯



第12図 吉ヶ谷後へ末素の住居跡

藏形態を考えたらよいであろうか。集落全体の調査例が少ないので、屋外土壙の存在やその位置関係を指摘するには資料に乏しいが、駒掘遺跡と神明ヶ谷戸遺跡(坂本他 1980)を例にとってみよう。駒掘遺跡では集落の南側に土壙群があり、18基の土壙が確認されている。規模や形態は一様でなく、覆土によっても2種類程に分けられ、18基すべてが同一時期、同一機能でない事が予想される。また、方形周溝墓の南10~20mの距離に集中している事から、墓壙としての土壙を考える事も出来る。しかし、5・6・7号土壙からは吉ヶ谷式土器が出土すると共に形態等から屋外貯蔵穴である可能性は充分である。駒掘遺跡の集落は出土土器や切合関係から2~3時期に細分できると思われるが、前述のY-5号住居跡は方形周溝墓と共に古い部類に入る。報告書にも記されている様にY-5号住居跡を中心に集落が形成されているが、この住居だけに貯蔵穴様の土壙があることは興味深い事実である。

神明ヶ谷戸遺跡では吉ヶ谷式の住居跡3軒と土壙3基、竪穴状造構が検出されている。出土土器については出土量が少なく、整理中であるので詳細は不明だが、比較的新しい段階であろう。土壙については、調査者の坂本、岡本両氏の御教示によれば、覆土などの観察から墓壙ではないとの事であった。形態からもこれを屋外貯蔵穴と考えても差し支えないであろう。

両遺跡の屋外土壙の存在とⅢ式の根平遺跡、桜山遺跡における屋内土壙の出現とを考え合わせると、吉ヶ谷集落における貯蔵形態の変化を伺うことが出来る。Ⅰ・Ⅱ式では、食料管理は共同体全体の問題であり、屋外土壙による集中管理が行なわれていたと思われ、駒掘遺跡では集落の中心的な住居にのみ貯蔵穴が存在した。Ⅲ式になると、屋外土壙はなくなり、代って各戸に屋内土壙が出現してくるのである。この様な貯蔵形態の変化は単に各住居の独立性、自主性の強化ではなく、逆

に共同体による食料管理の強化の結果といえるであろう。

この吉ヶ谷式の末期における貯蔵形態の変化は南関東系土器群の進出と共に吉ヶ谷社会の南関東化という理解の中で捉えることが出来るであろう。

ベッド状造構については、熊野正也（熊野 1974）、河野真知郎（河野 1975）の研究に詳しいが、併に祭祀、権力と関連付けている。ベッド状造構も中期以降に出現し、関東地方ではほぼ1集落に1つの割合で発見されるというが、吉ヶ谷式の集落ではこれまで確認されていなかった。ところが桜山遺跡で発見されて以来、籠田遺跡（村田 1982）や尾田遺跡（註7）で調査され、現在までにこの3例が知られている。いずれも吉ヶ谷式の後業から末業の時期であり、屋内貯蔵穴の出現とはほぼ一致している。特に桜山Y-3号住居跡はA-1類の住居型、凸帯を持つ貯蔵穴、ベッド状造構そして大型住居でもあり、住居を見る限りにおいては南関東と何ら変わることはない。Y-3号住居跡は正に吉ヶ谷社会の変貌を象徴する存在といえるだろう。この様に吉ヶ谷式でも後半以降になると住居型の変化、つまり南関東型の居住様式の採用、貯蔵形態の屋外から屋内へ、そしてベッド状造構という祭祀的な遺構の出現と社会構造全体にわたる変化を見る事が出来るのである。この事は、吉ヶ谷式の集団が縄文という文様に固執しつつ丘陵地での水田經營を確立し、独自の社会を形成したが、南関東を中心とした時代の流れを感じ取り急速に南関東化の道を辿っていたのであろう。

B類、D類住居の分布地域、とりわけ吉ヶ谷、朝光寺原式といった谷戸田を望む丘陵上に集落を営む姿は、いわゆる沼遺跡型の単位集団（近藤 1959）を想定する事が出来る。広大な沖積平野を控え、大集落の維持、運営が可能だったA-1類、南関東系土器の集落とは一線を画することが出来るであろう。吉ヶ谷、朝光寺原式の単位集団は地形等から独立的に水田の開拓、經營に向かわざるを得なかつた特殊な地域の集団であり、この事が、土器様相だけではなく住居構造や貯蔵形態にも影響を与え、類似地域と交流を持ちつつ独自の地域社会を築いていったと考えられるのである。

居住や婚姻の問題を住居構造の面から扱ってみたが、途中引用してきた民族例の解釈には多少の無理があった事は否めない。今後は住居構造や形態の分析に遺物を有機的に関連付けてこれまでの考えを補強し、新たな視点で弥生社会における居住様式の問題を追及していきたい。

最後に本稿を草するにあたり、増田逸朗、柿沼幹夫、石岡憲雄、坂本和俊、岡本幸男、当事業团弥生部会の諸氏には御指導、御教示を賜った。また、図版作成には丸山悦子、田口明美の各氏に御協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

註

- 1 神之木台遺跡で基準を示した例がある。しかし、統一的な基準とするには、さらに整備が必要であろう。
 - 2 たとえば隅丸方形を主体とする集落の中に、円形住居が存在する例は多い。
 - 3 西日本の弥生住居は円形で炉が中央にある事が多い。
 - 4 中期では須和田式がA—2類、宮ノ台式がA—1類が主体的でB類～D類の相應は見当らない。
 - 5 このような一般的解釈に対して牧謙二は、國大人は邑落の大人はなく君主クラスの人間であり、下戸も邑落の大人を指すとしている。牧謙二「第二～三世紀における倭人の社會」『史林45—2』 1962
 - 6 1975～76年に横浜市教育委員会が調査。須山幸夫、廣瀬有紀雄氏の御教示による。
 - 7 1979年に埼玉県教育委員会が調査。今井宏氏の御教示による。
- 吉ヶ谷式土器の編年については、柿沼編年に従った。

引用・参考文献

- ア 相京建史他『清里・庚申塚遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
会田道也『横原遺跡』岡谷市教育委員会 1981
- イ 斎塚博と「北関東地方弥生時代後期の堅穴住居址(1)」「異貌拾」共同体研究会 1983
石岡寛雄「吉ヶ谷式土器と岩鼻式土器について」『研究紀要4号』埼玉県立歴史資料館
石毛直道『住居空間の人類学』鹿島出版社 1971
石野博信『考古学から見た古代日本の住居』古代日本文化の探求『家』社会思想社 1975
石野博信『住居型の地域性』『三世紀の考古学』中巻 学生社 1981
泉靖一『泉靖一著作集7・文化人類学の貢献』読売新聞社 1972
井上尚明『埼玉県における弥生時代研究の現状と問題点』『情報7』埼玉考古学会 1980
井上唯雄・柿沼恵介『弥生土器 北関東3』『考古学ジャーナル143』 1977
井上義安他『髪塗』大洗地区遺跡発掘調査会 1980
今井正文『丸山遺跡発掘調査』『福川市遺跡群発掘調査報告書』福川市教育委員会 1983
オ 大川清治『鬼地遺跡』日本農業史研究所 1977
大林太良『讃文時代の社会組織』『季刊人類学2—2』 1971
大給近造『アマゾン126人の生活と文化 カムラ族』『住まいの原型』鹿島出版会 1943
岡本男・武井則道『朝光寺原式土器について』『横浜市埋蔵文化財調査報告書』 1968
岡本孝之『久ヶ原・弥生町周辺文化の諸問題』『異貌8』 1979
岡本孝之『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17 神奈川県教育委員会 1980
岡本幸夫他『神明ヶ谷戸遺跡の調査』遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 1980
小野忠熙『集落と住居』『新版考古学講座4』雄山閣 1969
カ 柿沼幹夫『吉ヶ谷式土器について』『土蔵考古5号』土蔵考古学研究会 1982
金井塚良一『埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査』『台地研究16』台地研究会 1973
待之木台遺跡調査グループ「待之木台遺跡における弥生時代の遺構と遺物」『調査研究集録3』港北二
ータウン埋蔵文化財調査団 1977
タ 鹿野正也『弥生土器 南関東3』『考古学ジャーナル139』 1977
鹿野正也『弥生時代集落構造の一考察』『史館2号』 1974.

- 栗原文藏他『雉子山遺跡の発掘調査』『岩の上・雉子山』埼玉県教育委員会 1973
- 栗原文藏他『駒岡』埼玉県教育委員会 1973
- 小出輝雄『針ヶ谷遺跡群』富士見市遺跡調査会 1983
- 神戸聖路他『引間遺跡』高崎市教育委員会 1979
- 河野真知郎『初期農耕集落の解明』『Circum Pacific 1』 1975
- 小久保徹他『鶴ヶ丘』埼玉県教育委員会 1976
- 小久保徹『弥生時代の大形住居について』『埼玉考古17号』埼玉考古学会 1977
- 小久保徹『猿山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 小島純一『赤井戸式土器について』『第三回三県弥生時代シンポジウム群馬県資料』 1982
- 小島純一『赤井戸式土器について』『人間・遺構・遺物』文献出版 1983
- 近藤義郎『津山弥生住居群の研究』津山市津山郷土館 1957
- 近藤義郎『共同体と単位集団』『考古学研究6-1』 1959
- 近藤義郎『弥生文化論』『日本歴史 原始および古代1』岩波書店 1971
- 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 1983
- サ 斎木勝・深沢克友『研究紀要3 弥生時代』千葉県文化財センター 1978
- 埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』 1971
- 斎藤国夫『池守遺跡』行田市教育委員会 1981
- 酒井清司他『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 辯原松司他『港北区森戸原遺跡調査報』『横浜市埋蔵文化財調査報告書』 1971
- 坂本京弘他『鎌勝寺遺跡』港北ニータウン地域内埋蔵文化財調査報告 V 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975
- 筒沢浩『中部高地型簡描文の系譜』『中部高地の考古学』 1978
- シ 清水昭俊『火の民族学』『日本古代文化の探求 火』社会思想社 1974
- ス 杉原莊介他『神奈川県二ヶ池における弥生時代後期の集落』『考古学集刊4-2』 1968
- 杉本尚次『四ツモアの村落』『民族学研究31-3』日本民族学会 1966
- 鈴木敏弘他『そとごう』考古学資料刊行会 1972
- セ 濑川裕市郎他『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会 1981
- 関友彦他『神庭遺跡』 1974
- 関野克他『登呂』日本考古学協会 1954
- ソ 曾根原裕明他『秩父薬師堂遺跡』丙神村薬師堂遺跡発掘調査会 1981
- 畠田芳雄『群馬県新里村峯岸山遺跡発掘調査報告1次・2次』新里村教育委員会 1975
- タ 高倉洋彰『弥生時代の集団組成』『九州考古学の諸問題』 1975
- 武井則道他『大塚遺跡発掘調査報』『調査研究集録1』港北ニータウン埋蔵文化財調査出 1976
- 田中義昭『南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題』『考古学研究22-3』 1976
- 谷句他『小黒谷遺跡発掘調査報』中央大学考古学研究会 1973
- 田部井功『袋・台遺跡』吹上町教育委員会 1982
- 田村言行他『江原台』佐倉市教育委員会 1979
- 田村言行『弥生時代後期における南関東の動向』『どるめん23』 1979

- テ 寺畠滋夫他『下山遺跡』世田谷区遺跡調査会 1982
- ナ 中島宏他「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」『資料館報No.13』埼玉県立さきたま資料館 1982
- 中山晋也『築工業団地内遺跡調査報告』栃木県文化振興事業団 1981
- 中根千枝『家族の構造』東大出版局 1970
- ニ 日本民族学会「シンボシクム家 民族学における物質文化の諸問題」『民族学研究34-2』 1969
- ヌ 沼沢豊他『佐倉市飯坂作遺跡』千葉県文化財センター 1978
- ハ 服部歎史他『鞍骨山遺跡』東京都八王子市谷野遺跡調査団 1971
- 村幸彦他『下平』佐久市教育委員会 1981
- 林幸彦・花岡弘「弥生時代の炉」『信濃35-4』 1987
- 原ひろ子「ヘヤー社会におけるテント仲間と身うち」『現代のエスプリ別冊3』 1983
- 春成秀爾「縄文時代の複婚制について」『考古学雑誌67-2』 1981
- ヒ ピーター・ラスレット「家族と世帯への歴史的アプローチ」『家の歴史社会学』新評論 1983
- フ 福田敏一他『中里前原遺跡2次調査』与野市教育委員会 1981
- 藤島玄治郎他『平出』平出遺跡調査会 1954
- マ M・D・サーリング『部族民』現代文化人類学5 鹿島出版会 1972
- ミ 水野順敏他『東京都狛江市岩戸八幡神社遺跡』日本歴史研究所 1981
- 水村米行『根平』埼玉県教育委員会 1980
- 宮沢恒之「弥生住居址の分析」『信濃25-12』 1973
- ム 村田健二『龍田・勘田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- ヤ 矢口忠良他『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』長野市教育委員会 1980
- 山田瑞穂他『桶口内城船塗遺跡』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡波野町その2』 1973
- ロ ロジャー・M・キージング『親族集団と社会構造』未来社 1982
- ワ 和島誠一他『三殿台』横浜市戸塚区三殿台遺跡集落調査報告』 1965
- 和島誠一・田中義昭「住居と集落」『日本の考古学Ⅱ 弥生時代』 1966

研究紀要

1983

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所